曲目紹介

ヘンデル／ハープ協奏曲　変ロ長調

　ドイツ出身のゲオルク・フリードリヒ・ヘンデルはバロック期を代表する作曲家です。同時期に活躍した音楽の父と呼ばれるJ.S.バッハがいたことから、ヘンデルは音楽の母と位置づけられることもあります。

　『ハープ協奏曲』はオルガン協奏曲集の中の一曲として出版されましたが、音楽史上最も古いハープ協奏曲とされています。急・緩・急の三楽章形式のなっており、二楽章の終わりに今回はフランスのハープ奏者、グランジャニーが書いたカデンツァを抜粋して演奏します。

カラミエッロ／華麗なる幻想曲、ナポリの思い出

　イタリア、ナポリに生まれたジョヴァンニ・カラミエッロは、皇帝お抱えのハープ奏者として活躍した兄の手ほどきでハープを始めました。指導者、演奏家、そして作曲家という役割が今ほど分断されていなかった当時において、カラミエッロは指導者として数多くの教則的な作品を遺しました。

　『華麗なる幻想曲』はミケール・ルタの作曲した歌劇「フォルナリーナのロマンス」のメロディに着想を得た作品です。この歌劇についてはラファエロ・サンティによる絵画に基づいた内容だということが伝わっていますが、今では作品の背景については殆ど知られていません。他方、『ナポリの思い出』はナポリ民謡の「光さす窓辺」「サンタ・ルチア」に基づいた作品で、カラミエッロが好んで用いた題材でもありました。

ロータ／サラバンドとトッカータ

　僅か12歳で作曲したオラトリオが初演されるなど、早熟ぶりを発揮していたニーノ・ロータ。多才な作曲家であり（自身では純音楽の作曲だと主張していたものの）、80曲にものぼる映画音楽を手掛けています。中でも特にコッポラ監督による「ゴッドファーザー」の音楽は皆さんご存知のことと思います。

　『サラバンドとトッカータ』は1945年に作曲、『ハープ協奏曲』の３年前に手掛けられ、偉大なハープ奏者クレリア・アルドロヴァンディ・ガッティに献呈されています。美しい和音の重なりでサラバンドが始まると、トッカータはプーランクの音楽語法を思わせる雰囲気です。

黛敏郎／ROKUDAN

　黛敏郎は20世紀を代表する作曲家の一人であり、その活動は管弦楽曲からオペラ、映画音楽まで多岐にわたっていました。また、テレビ朝日「題名のない音楽会」の初代司会者を務め、幅広い支持を集めました。

八橋検校が書いた伝統的な箏曲『六段の調』のメロディーを元にハープ独奏曲として作曲されたこの曲『ROKUDAN』は通常の演奏方法の他に、楽器の共鳴板を手で叩いたり、弦で爪で擦ったりと、視覚的にも楽しめるような様々な奏法が盛り込まれています

～　休　憩　～

ボクサ／ロッシーニの歌劇「セビリアの理髪師」より「そっと静かに」に基づくロンド

フランスに生まれたロベール・ニコラ＝シャルル・ボクサは、パリ音楽院でハープを学びナポレオン１世の宮廷楽団のハーピストとして華々しく活躍しましたが、その一方で波乱万丈な人生を送りました。通貨偽造や結婚詐欺などの罪に問われイギリスへ逃亡し、ロンドンで王立音楽アカデミーの学長を務めますが、前歴が発覚し辞職に追い込まれます。その後不倫関係にあったオペラ歌手と駆け落ちして行方をくらまし、ヨーロッパやアメリカを演奏活動をしながら転々とした末、オーストラリアのシドニーで亡くなりました。

彼がハープのための残した作品には、音階や分散和音といった基礎が重要となるパッセージが多く使われています。その中でも数々のエチュードはハーピストなら誰もが取り組む課題になっています。『ロッシーニの歌劇「セビリアの理髪師」より「そっと静かに」によるロンド』は、劇中にある伯爵とロジーナ、フィガロによる三重唱のパラフレーズです。ボクサらしいテクニックが詰まっていますが、イタリアオペラの明るさとも相まって、心が弾む楽しい作品となっています。

レスピーギ／シチリアーナ

イタリア、ボローニャに生まれたオットーリノ・レスピーギ。『ローマの噴水』『ローマの松』『ローマの祭り』のいわゆるローマ三部作で知られる近代イタリアを代表する作曲家ですが、同時代のマスカーニの歌劇『カヴァレリア・ルスティカーナ』に代表される劇的な表現を特徴とするヴェリズモ主義から距離を置き、現代的な音楽を追及しました。他方、レスピーギの興味深い指向性として、古楽の復興が挙げられます。ヴィヴァルディに代表される 17 世紀イタリア音楽の調査・研究を続けていましたが、このシチリアーナが収められた『リュートのための古風な舞曲とアリア』は、自身の代表作にも数えられるほどの大きな成功を納めました。リュート、あるいはテオルボやヴィオールといった楽器のために書かれた器楽曲に着想を得て、３つの組曲から構成されています。

本日はグランジャニーの編曲により演奏します。原曲のエッセンスを損なうことなく、グランドハープのポテンシャルを最大限に引き出すように、多彩な響きを聴くことができます。

ラ・プレール／雨に濡れた庭

フランスの伝統ある貴族の家系に生まれた作曲家、ジャック・ドゥ・ラ・プレールは、パリ音楽院で学んだ後、ヴェルサイユのノートルダム教会のオルガニストに就任しました。その後母校で和声学の教鞭を執り、多くの作曲家を育てました。日本の作曲家矢代秋雄も彼の生徒の一人です。

ピアノや歌のための作品を多く残しましたが、『雨に濡れた庭』は前述のグランジャニーのために書かれました。そこには「私は雨音を感じ、自分の中の暗闇に包まれる」というレニエの詩が添えられています。ハーモニクスやグリッサンドといったハープらしい繊細な響きが印象的ですが、内に秘めた静かな情熱を感じる曲です。中間部に繰り広げられるアルペジオは溢れ出る感情を表現しているかのようで、その色彩の豊かさはフランス、ジヴェルニーのモネの庭を連想させます。

ドビュッシー／月の光

フランスの作曲家、クロード・ドビュッシーは幼少期から音楽の才能を見出され、パリ音楽院でピアノを学びました。その後作曲家の道へ進み、登竜門であるローマ大賞を受賞し、それから発表した数々の作品は、かつての西洋音楽にとらわれない独創的なものでした。印象派音楽の始まりと言われる『牧神の午後への前奏曲』をはじめ、彼の管弦楽曲ではハープが効果的に使われることが多いです。ハープ独奏と弦楽合奏による『神聖な踊りと世俗的な踊り』と『フルートとヴィオラ、ハープのためのソナタ』の２曲がハープのために書かれ、重要なレパートリーとなっています。

『月の光』は、詩人ヴェルレーヌによるイタリアの宮廷での仮面舞踏会の情景を描いた詩集『艶やかな宴』に収められた同タイトルの詩からインスピレーションを受け、最初は歌曲として書かれ恋人に捧げられましたが、数年後違うメロディーを用いてピアノ独奏曲として書き直されました。近年では様々な楽器で演奏されていますが、幻想的な中にある哀しさにこの曲の本質を感じます。ただ優美なだけでなく、どこか凛とした光を表現したい作品です。

スメタナ／モルダウ

ベゴルジハ・スメタナは、当時オーストリア帝国領であったボヘミア地方の小さな町、リトミシュルで生まれ、チェコの国民楽派の先駆者となった作曲家です。ボヘミアの自然と歴史を題材にした全６曲から成る連作交響詩『我が祖国』は７年の歳月をかけて完成させた自身の代表作であり、その第２曲『モルダウ』は、今日、最も有名な管弦楽曲の一つと言えます。後に同じくチェコのハーピスト、ハンス・トルネチェクによってハープ独奏版が書かれました。

チェコを流れるモルダウ川の最初の源流から曲は始まります。陽の光が当たりきらめく水の雫、そして第二の源流が合わさり一つの大きな流れとなり、有名な「モルダウの主題」へと続きます。「森・狩り」の場面はハープならではの分散和音で表現され、盛り上がりを増していきます。そして続く「月の光・水の精の踊り」の場面では、オーケストラで演奏されるときもハープが効果的に使われており、幻想的な世界が独奏版でも描かれています。そして波の揺れが広がってゆき、再び主題へと戻ります。「聖ヨハネの急流」でさらに増す音の数はまるで嵐のようで、クライマックスが近づいていることを予感させます。次に現れる「高い城の主題」はハープの独奏から始まる『我が祖国』の第１曲からの引用で、ハーピスト冥利に尽きるメロデイーです。そして川は長い流れを経てドイツのエルベ川へと消えてゆき、曲が締めくくられます。

山宮　るり子